目　次

言語と文化　本書の概要・背景・意義 vii

第１章　言語と文化　社会言語学への導入 1
1.　言葉の仕組み 1
1.1.　音素・音韻論 2
1.2.　形態論・形態素論 5
1.3.　統語論 9
1.4.　意味論 10
1.5.　語用論 12
1.6.　ディスコース(談話)分析 15
1.7.　要約 15
2.　文化とは何か 16
2.1.　文化の定義 16
2.2.　文化化 16
2.3.　文化化と自己 17
2.4.　文化的スキーマ・スクリプト 18
3.　文化研究と言語研究の統合としての社会言語学 19
3.1.　Chomsky の言語学 vs. Hymes や Labov に代表される社会言語学 20
3.2.　異文化間コミュニケーション 21
4.　生きた言語使用をどう考察するか：言葉の変化(バリエーション) 22
4.1.　言語の記述方法 23
4.2.　動詞・形容詞・副詞に見られる「言葉の乱れ」 24
4.3.「言葉の乱れ」が古い表現なのか新しい表現なのか 33
4.4.　曖昧表現 38
4.5.　言葉の動き 40
4.6.　社会言語学で取り扱う諸様相 49

第２章　文化と言語　言語相対性仮説(認知意味論の立場から) 53
1.　生まれか育ちか：普遍性と固有性 53
1.1.　生得的・先天的 vs. 学習・後天的 53
1.2.　知能指数が何を意味するのか：知能(IQ)テストの包含する問題 55
1.3.　要約 56
2.　言語普遍性と言語固有性 56

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

2.1. 言語固有性：翻訳で生じるさまざまな問題 56
2.2. 言語固有性：主語の問題 60
2.3. 言語普遍性 61
2.4. 言語普遍性：認知意味論の立場から 66
3. 社会心理学における普遍性の研究 68
3.1. Ludwig Wittgenstein：家族的類似性 68
3.2. 階層分類 69
3.3. プロトタイプ理論 71
3.4. 色彩分類 73
3.5. 認知意味論の要約 75
4. 言語固有性：言語相対性仮説 78
4.1. Sapir-Whorf 仮説 78
4.2. 具体例から考察した言語相対性仮説：ミシュテック語(Mixtec) 80
4.3. 具体例から考察した言語相対性仮説：数の数え方 80
4.4. 具体例から考察した言語相対性仮説：助数詞 82
4.5. 具体例から考察した言語相対性仮説：受動態 84
4.6. 具体例から考察した言語相対性仮説：名詞の性 85
4.7. 言語相対性仮説の要約 85
5. 具体例：仮定法の時制 86
5.1. 新聞等に見られる言葉遊び(pun・懸詞) 86
5.2. 新聞等に見られる仮定表現 89
5.3. ナラティヴ現在 95
6. 仮定法の時制の有無が概念に影響を及ぼすのか：Alfred Bloom の研究 96
6.1. 反事実を表す仮定表現 96
6.2. Sapir-Whorf 仮説を支持する Bloom の研究 98
6.3. Bloom の研究の要約 102
7. 仮定法の時制の有無が概念に影響を及ぼすのか：Terry Kit-fong Au の研究 103
7.1. Bloom の研究への反論 103
7.2. Bloom と Au の研究結果をどう解釈するのか 106
7.3. 認知的アクセスを容易にする語彙の存在 106
8. 第 2 章の要約 110
8.1. 言語普遍性 110
8.2. 言語相対性 111

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第３章　丁寧表現、敬語における普遍性と多様性
待遇表現(social deixis)としてのポライトネスとポライトネス行動(語用論)..... 113
1.　文化と自己..... 113
1.1.　相互依存の自己 vs. 自立した自己..... 113
1.2.　自己を構成する要因：社会と性..... 115
2.　人称代名詞が意味するもの：
Brown & Gilman の連帯感(solidarity)に関する研究..... 117
2.1.　インフォーマル・親密感・連帯感・仲間意識 vs. フォーマル・儀礼的.. 118
2.2.　英語の場合..... 118
3.　人称代名詞と呼称語(称号・敬称)の意味するもの..... 119
3.1.　呼称..... 119
3.2.　名前・ニックネーム vs. 姓における距離感の違い..... 122
3.3.　日本語の人称代名詞..... 125
3.4.　親族の呼称：丁寧語・尊敬語と謙譲語..... 128
3.5.　要約：自分はいったい何者なのか..... 129
4.　普遍概念としてのポライトネス行動..... 130
4.1.　スピーチレベル・シフト..... 130
4.2.　リスペクト..... 130
4.3.　Brown & Levinson のポライトネス理論..... 131
4.4.　丁寧さはどのようにして増すのか..... 137
5.　普遍概念としてのポライトネス行動ストラテジーの具体的検証：
ポジティブ・ポライトネス..... 139
5.1.　ストラテジー１：興味・欲求に応える..... 140
5.2.　ストラテジー２：関心・(称賛などの)承認・同情を誇張する..... 140
5.3.　ストラテジー３：(感謝などで)貢献度を強調する..... 141
5.4.　ストラテジー４：仲間であることを示す..... 142
5.5.　ストラテジー５：同意点を探す..... 142
5.6.　ストラテジー６：意見の相違を回避する..... 143
5.7.　ストラテジー７：協力関係を強調する..... 143
5.8.　ストラテジー８：申し出たり、約束する..... 143
5.9.　ストラテジー９：(依頼などで)楽観的な態度を取る..... 143
5.10.　ストラテジー 10：共同行為であることを示す..... 144
5.11.　ストラテジー 11：理由を説明したり、説明を求めたりする..... 144
6.　普遍概念としてのポライトネス行動ストラテジーの具体的検証：
ネガティブ・ポライトネス..... 145
6.1.　ストラテジー１：定型表現を用いて間接的に働きかける..... 145

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

6.2. ストラテジー 2：ヘッジを用いる 146
6.3. ストラテジー 3：悲観的にふるまう 146
6.4. ストラテジー 4：強制や押しつけを極力避ける 146
6.5. ストラテジー 5：敬意を示す 147
6.6. ストラテジー 6：謝罪する 147
6.7. ストラテジー 7：非人称表現を用いる 147
6.8. ストラテジー 8：一般的規則としてフェイス侵害行為を述べる 147
6.9. ストラテジー 9：名詞化する 148
6.10. ストラテジー 10：受けた恩義は認め、与えた恩義は押しつけない 148
7. 文化固有性・独自性としてのポライトネス行動 149
7.1. 文化固有性 149
7.2. 文化的要因と状況的要因：異文化間語用論(cross-cultural pragmatics) . 151
7.3. 褒め言葉にどう返答するか：異文化比較 154
8. 日本語の敬意表現 158
8.1. 尊敬語と謙譲語 158
8.2 曖昧表現 160
8.3. さらに議論すべき問題：方言・地方語 166
9. 第 3 章の要約 168
9.1. Brown & Gilman の研究 168
9.2. 普遍概念としてのポライトネス：Brown & Levinson の研究 168
9.3. 文化固有性・独自性としてのポライトネス行動 169

第 4 章　言語内変異(1)　言葉の変化と方言・地方語(言語地理学・方言地理学) 171
1. 社会言語学とは：言語内変異 171
1.1. 想像上の村：スピーチコミュニティー 172
1.2. 世代による語彙の相違 173
1.3. 「ジッ」か「ジュッ」か 176
1.4. 「ら抜き言葉」に見る規則性 176
1.5. 英語の代名詞に見る規則性・不規則性 181
2. 社会言語学的研究をどのようにして行なうか 183
2.1. 言語資料の収集方法・手段 183
2.2. 等語線 191
3. 方言周圏論 193
3.1. 言語資料の収集方法・手段 193
3.2. 家：いえ vs. うち 193
3.3. 方言周圏論 195

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

3.4. おんな vs. おなご 196
3.5. いる vs. ある 197
3.6. 明後日の翌日を何というのか：隣接意味分野への侵入・滲み出し ... 201
3.7. 「こわい」の意味するもの 202
4. 方言周圏論が成り立つかどうか：語彙調査 203
4.1. バカ vs. アホ 203
4.2. 『全国アホ・バカ分布考』との出会い 207
4.3. 「アホ・バカ」言葉の分布状況 208
4.4. 「アホ・バカ」言葉の歴史的変遷 210
4.5. 「デレスケ」と「テレスケ」 211
4.6. 定型表現・常套句からの「アホ・バカ」歴史考察 212
4.7. 定型表現・常套句の一般的考察 214
5. 社会指標形式・行動におけるバリエーション：
対話相手に合わせてものを言う 214
5.1. 関西弁内の多様性・地方性 214
5.2. 京都弁・京ことば 215
5.3. 関西弁再考察 217
5.4. スピーチ・アコモデーション理論 219
6. 方言周圏論の文化論への敷延：Center of Innovation（革新の中心） 221
6.1. 文化の伝播 221
6.2. 文化と自己（アイデンティティ） 222
7. 第 4 章の要約 226
7.1. 革新の中心 226
7.2. 方言周圏論 227

第 5 章　言語内変異(2)　方言、社会階級差、性差（クリティカル言語学） 229
1. 方言から社会階級差へ：William Labov vs. Basil Bernstein 229
1.1. William Labov の研究：マーサズ・ヴィニヤードの発音調査 230
1.2. William Labov の研究：ニューヨーク市の発音調査 234
1.3. Basil Bernstein の研究 238
2. 言語と性差：男性と女性の言語行動 246
2.1. 社会文化的要因 246
2.2. 演歌に見る性差 247
2.3. 生得的・先天的側面：生物学的要因 249
2.4. 要約と今後の議論のために 249

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

3. 英語に見られる性差 250
3.1. 英語の語彙に見られる性差：3 人称の代名詞 250
3.2. 意識革命としての女性解放運動 251
3.3. Robin Lakoff の研究：言語使用を権力具現装置として捉える支配モデル (Dominance Framework) 253
3.4. Daniel Maltz & Ruth Borker の研究：文化差モデル (Difference Framework, Dual-culture Model) 261
3.5. 要約 263
4. 日本語に見られる性差 265
4.1. 女性語の普遍的側面と言語固有的側面 265
4.2. マスメディアに見られる性差を示す表現 269
5. 第 5 章の要約 275
5.1. 翻訳・通訳における役割語の与える心理的効果 276
5.2. 異文化比較 281

第 6 章　言語と発達　発達心理言語学の立場から 284
1. 人間発達の普遍性と文化固有性 284
1.1. 認知発達理論：Jean Piaget の発達段階理論 284
1.2. 言語発達に見られる規則性：認知発達の立場から 291
1.3. 語用面からの考察の重要性 299
1.4. 文化固有性 303
1.5. 文化的影響：双方向作用の重要性 307
2. 「話しことば」から「書きことば」へ 310
2.1. 語りの発達とその重要性 310
2.2. 話しことばと書きことば 317
2.3. 連続体、非連続体としての話しことばと書きことば 320
2.4. 連続体としての話しことばと書きことば：国語の教科書から 327
2.5. 書きことばに見られるさまざまなスタイル：書き手と読み手の関係 329
3. 第 6 章の要約 334

参考文献 337
索引 352

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

言語と文化　本書の概要・背景・意義

文化は言語現象、とくにコミュニケーションのさまざまな様相に関わっている。それゆえ文化と言語の密接な関係に注目することなく言語学習・言語獲得、そしてそうした言語活動の最終目標・到達点であるコミュニケーションを論じることは不可能だろう。文化は言語構造や機能に多大な影響を与えており、言語は文化の所産、文化の具現化と言っても過言ではない。言語を理解しなければ文化理解は不十分であり、言語の背景にある文化を理解しなければ言語を十分には理解できないという循環が存在するのである。こうした意味で、言語は我々個々の人間の思考、ものの見方、さらには世界観を表現する手段であり、そうした言語手段に影響を与えている背景としての文化を理解することは、現代のグローバル社会においては、とりわけ重要な意味を持つと考えられる。文化こそ言語学習・言語獲得の礎となるものだが、それだけにとどまらない。本書は、文化と言語、そして言葉を通しての自己表現を含む「自己との関わり」を探ろうとするものである。

本書の特徴のひとつとして、現代の日本文化を代表するポップカルチャーやスポーツなど文化に関わる親しみやすい具体例を数多く収録し、そこから文化と言語のつながりを探っていることがあげられよう。具体的には、新聞のスポーツ欄、とくに野球や文化・芸能欄の記事で使用されている言語表現のみならず、テレビのバラエティー番組やドラマ、そして映画などで使用されている言葉を例として数多く用いている。筆者の本意は必ずしも大衆芸能・文化の分析ではないが、ポップカルチャーやスポーツなどの例を引用することで、読者に言語の諸様相に親近感をいだき、日常生活で感じる日本語の変化に関心を持ってもらいたいと願っているからである。さらには「言語とは何なのか、社会と言語、人間と言語はどのように関わっているのか」という問題意識を読者の中に喚起したいからである。本書はこうした意味においてユニークであり、エンターテインメント性のある学術書を目指していると言えよう。

言語学には、社会言語学のみならず、応用言語学・コーパス言語学・心理言語学・対照言語学・認知言語学・歴史言語学など、さまざまな分野がある。本書は、具体的には、心理言語学・社会言語学・言語人類学に基づいた談話（ディ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

スコース)レベルでの研究を中心としたものである。歴史的に、言語学の分析では音素・音韻・形態素・統語論・意味論というように言語をいくつかのレベルに分けて研究してきた。そしてChomsky(チョムスキー)(1965)の生成理論以来、現代言語学では「言語は人間にとって生得的なものである」という普遍性を追及した言語分析が主流となった。こうした流れの中で中心となったのは、主に文レベル、つまり統語(シンタックス)的な研究であった。しかしながら、文構造より大きい単位での談話(ディスコース)構造にも普遍性が存在するという主張もある(増田 1999)。それと同時に言語が、ある文化・社会の中で、どのような役割を果たしているかという言語固有性もしくは個別性、さらには文化的固有性を検証する必要もある。つまり、包括的には、言語が実際の社会でコミュニケーションの手段として、どのような機能を果たしているのかという機能分析を行なう際にも、文を上限としないで、文の集合体としての談話という、より大きい単位での構造分析を行なう必要性が生じてくる。こうした談話(ディスコース)レベルでの分析を、本書はその根幹としており、そうした分析をできる限りわかりやすく解説しようと試みている。

では、「社会言語学で何を考えるのか？」という問題を本書ではどのように捉えているのかを述べたい。まず、社会言語学では「日本語とはこういうもの、こうあるべきで、日本文化とはこういうものなのだ」と主観的な視点から語ることはない。「言葉をこんなふうに使用する人がいるけれど、それはなぜなのだろう？」という疑問に対して、何らかの説明を加えようという試みが社会言語学の方向性である。さらに、文化的先進国で使用されている言語でも、開発途上国で使用されている言語でも、また同一国内に目を転じてみても、共通語(標準語)でも方言でも、それらのすべてが言語体系としては平等であり、真田(2006)が述べるように、「未開の言語」や「くずれた言語」などというものは存在しない。これはピジン・クリオールとそれらの語彙供与言語を比較しても言えることだろう。しかし、言語体系としては平等でも、社会の中での言語間不平等は厳として存在する。たとえば、先進国で使用される言語のほうが開発途上国で使用される言語よりも社会的により高い地位にあることは否めないし、共通語・標準語のほうが方言・地方語より洗練されていると一般的には考えられているのではないだろうか。本書では、地域方言・社会方言・書きことばと話しことばのスタイルなど、さまざまな変異・変種(バリエーション)を考察し、「どちらが優れているのか」といったステレオタイプ(固定観念)が必ずしも的を得ていないこと指摘したい。

具体的には、本書の構成は次のようである。第1章では遍く言語に適応しう

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第１章

言語と文化　社会言語学への導入

言語とその言葉が使用されている文化・社会が切っても切れない関係にあることは、我々の誰もが無意識のうちに認識していることだろう。我々は皆、日常生活のなかで自分の意思を相手に伝達するために、何らかの形で言葉という手段を用いているが、これは文化・社会と深く関わっている作業である。我々は生まれたときから日本なら日本、アメリカならアメリカという、ある特定の文化・社会のなかで育っており、社会行動を通して学んだ規範に基づいて、伝達手段としての言葉を用いている。これは極端な例だが、言葉の発信者と受信者の間に発音・語形・語彙・意味などが共有されていないと、意思の疎通が不可能だとは言えないまでも、はなはだ困難だろう。こうした言語と社会の関わりについて調査を行なう研究分野を、一般に「社会言語学」(sociolinguistics)と呼ぶ。社会言語学は、社会と言語の関係を、さまざまな角度から総合的・包括的に研究することを目的とする学問であり、その取り扱う研究範囲・分野は多岐にわたる。

もちろん、本書は社会言語学だけにとどまるものではなく、言語発達を含めた事柄を議論し、その分析手法として認知的アプローチを取っている。そういう意味で、本書ではときとして認知言語学的側面、応用言語学的側面、心理言語学的側面、ひいては社会心理学的側面を強調することになる。言い換えれば、社会心理学的側面から見た言語の研究である。しかし、同時に社会言語学的手法を随所に用いながら全体としての議論を進めていくものである。そこで、第１章では社会言語学を理解し考察する準備として、社会言語学を織りなす縦糸と横糸とも言うべき二つの概念──言語と文化──を中心に論じる。まず形式・構造主義に基づいて言語のさまざまな基本的要素を特定する。言語の諸要素を理解することは、言語に影響を及ぼす社会的・文化的要素についての考察を容易にすると考えるからである。さらに、文化とは何なのかを論じ、言語と文化の統合を試みる。最後に、身近でわかりやすい例をいくつか挙げながら本書の方向性を明確に示唆する。

1.　言葉の仕組み

言語学、とくにChomsky(チョムスキー)(1957, 1965, 1985)に代表される形式主義(formalism)もし

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

くは構造主義(structuralism)の立場では、言語とは心理現象の表象であり、自律的な体系としての言語、言葉の仕組みに重点を置いてきた。すなわち、言語とは社会・文化にかかわらず「ヒト」という種の遺伝形質に由来するもので生得的であるということが関心の第一義であった。こうして、どのような言語にも普遍的に存在する特性に従って、構造言語学では従来、音素・音韻論、形態論・形態素論、統語論、意味論、語用論といった区分から言語の記述を試みてきたのである。ここでは、まず、こうしたミクロ言語学の区分に沿って言語学の分野を要約する。

1.1. 音素・音韻論

1.1.1. 訓令式 vs. ヘボン式の意味するもの

音素・音韻論(phonemics, phonology)は、音に関する要素の系統的なパターンを研究する分野である。ここで、ローマ字表記の訓令式とヘボン式を思い浮かべてみたい。訓令式は1937年の内閣訓令『国語ノローマ字綴方二関スル件』にその端を発する。これに対してヘボン式は明治時代にアメリカ人宣教師James(ジェイムズ) Curtis(カーティス) Hepburn(ヘボン)(1815－1911)が編纂した辞書『和英語林集成』によって広まったものである[注：実は、ヘボンはオードリー・ヘプバーン(Audrey Hepburn: 1929-1993)と同姓のHepburnなのでヘプバーン式と呼んだほうが適切かもしれない]。訓令式とヘボン式の最も大きな違いは、ヘボン式が音声レベル(phonetic level)に基づいているのに対して、訓令式が抽象的な音素レベル(phonemic level)を基にしていることである。このことはこの2種類の表記方法の起源からも明らかだろう。ヘボン式が日本語を母語としないアメリカ人宣教師によって開発されたのに対して、訓令式は日本語を母語とする子女の学校教育の場で使用することを目的として開発されたローマ字表記である。たとえば、サ行を実際の音に基づくヘボン式では“sa, shi, su, se, so”と表記するが、抽象的な(そして日本語母語話者には抽象的なレベルで十分な)訓令式では“sa, si, su, se, so”と表記する。日本語では音素/s/には[s]と[sh]という異音(allophones)が存在し、これらは相補分布(complementary distribution)である。音素/s/が前舌母音(front vowel)[i]が後に続く場合にのみ口蓋化(palatalization)による同化(assimilation)をおこして[sh]となる。母語話者にとってはこうした[shi]と[si]の区別は不要であり、音素レベルの表記、すなわち訓令式で十分である。しかし、日本語を母語としない話者には不十分ということになり、よってヘボン式が適切である。

こう考えれば、地名などを示す道路案内・地名案内がヘボン式である理由が明らかだろう。そうした案内をローマ字で読むのは日本人とは限らない、もしくは

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

文化と言語　言語相対性仮説(認知意味論の立場から)

言語類型論(linguistic typology)は、広く世界中の言語の特徴を収集・比較検討し、類似点ならびに相違点を探ることで人間の言語が持つ共通的特徴を探り当てようとする研究分野である。こうした研究を通して認められた共通的特徴、つまり、すべての言語に普遍的な要素は言語普遍性(language universal：Comrie, 1981)と呼ばれる。本章では、まず言語普遍性に関して認知意味論の立場から具体例を挙げて検討し、なぜ普遍性が存在するのかを認知的観点から考察する。ちなみに、認知意味論もしくは認知言語学は 1970 年代から発展した意味研究で、認知活動の一部としての言語活動を通して、人と文化の本質を探ろうと試みる言語学の一分野である。具体的には(ときとして曖昧だが)何らかの属性・プロトタイプ(原型)・カテゴリーの階層分類などの視点から普く言語に適応しうると考えられる様相を探る。次に「異なる言語を話す者は、その言語の相違ゆえに異なったように思考する」と提唱する Sapir-Whorf(サピア-ウォーフ)言語相対性仮説(Whorf, 1956)を検証することで言語固有性もしくは個別性を考察する。たとえば、日本語のように「本」「台」などの助数詞が顕著である言語を母語とする話者は、英語のように助数詞の使用が相対的に顕著ではない言語を母語とする話者とは事象に対する概念が異なるのだろうか(Lakoff, G. 1987)。本章の後半では、言語相対性仮説を支持する Bloom(ブルーム)(1981)が行なった仮定表現(反事実)の時制の有無が概念に与える研究と、そうした Bloom の研究結果とその解釈が妥当でないと異議を唱える Au(アウ)(1983)の研究を中心に議論を進める。

1.　生まれか育ちか：普遍性と固有性

1.1.　生得的・先天的 vs. 学習・後天的

1.1.1.　Chomsky(チョムスキー) vs. Skinner(スキナー)

前章では、文化が遺伝的に受け継がれるものではなく、後天的に学習を通して習得されるものであることを学んだ(第 1 章 2.4. を参照)。俗に言う「氏より育ち」である。では、言語の場合はどうだろうか。言語の習得は、どの程度までが生得的なものなのか、あるいは学習するものなのか。その答は定かではない。現在までのところ明らかなのは、言語習得のある側面は学習により、またそのほかのある側面は生得的であるということである。我々はどのように言語を学習するのだ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

ろうか。ここで言語発達を例に取ってみよう。「刺激 ― 反応(stimulus-response)の反復結果としての習慣形成による行動」という学習理論を提唱した Skinner(1957)は、言葉の学習も例外ではなく「子どもは、その自然な環境下で耳にする音を模倣し、練習することにより母語を学ぶ」との仮説を立てた。これに対して、Chomsky(1959)はこうした行動主義(behaviorism)に基づく仮説を否定し、「人は構文、文法、および語用などに関して生得的能力を持つ language acquisition device(言語獲得装置)、略して LAD という言語獲得のための装置を所有しており、言語獲得装置のおかげで、どのような言語・文化環境に置かれても、子どもはその環境で話されている言語を獲得し使用することができるようになる」と主張した(Chomsky, 1965, 1968, 1982)。LAD が脳内の「言語中枢」と呼ばれるウエルニッケ野(Wernicke's area)と話しことばを産出するブロッカ野(ブローカ野：Broca's area)を指すのか、そうでないのかは不明である。ちなみに、Chomsky に従えば、生来持っている言語能力である言語獲得装置が外的刺激を受けて作動するだけで(この場合のみ外的刺激は必要)「習う」ものではないので、ここでは「習得」ではなく「獲得」という言葉を使用している。とくに先天的に備わっている言語能力を骨格とする Chomsky(1965)の生成文法理論以来、「言語は人間にとって生得的なものであり、文法はヒトという生物種に固有のものである」という普遍性を追求した言語分析が少なくとも言語学の分野では大きな流れとなった。

1.1.2. nature vs. nurture：「生まれ」か「育ち」かという二元論

人間発達が遺伝的制約を強く受けているのか、つまり、先天的に備わった能力(nature)に基づいているのか、それとも環境からの学習の結果として後天的に学びとった能力(nurture)なのか、つまり「生まれか育ちか」という二項対立の図式が長く続いてきた。上述したように、人間の生得的な言語能力が重要であると考える合理主義者(rationalist)の代表とも言うべき Chomsky(1959)と、外的刺激に反応して習慣を形成し知識を身につけていくとする経験主義者(empiricist)、とりわけ行動主義者(behaviorist)の Skinner(1957)の論争はその好例である。ここで誤解を招かないように断っておきたいのは、行動主義心理学が人間の内面、とくに「心の動き」を無視したと考えるのは早計だということである。「心の動き」といった目に見えないものは科学的研究の対象とはならない、観察できるもの(observable behavior)、それのみが科学的な研究の対象となりうる、と Watson(ワトソン)(1958)を創始者とするアメリカの行動主義心理学では考えたのである。

とにかく、「生まれか育ちか」という議論は言語だけでなく、数多くの分野で

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers